

詩

【小学1年生・2年生】

特選

わたしのかみの毛

城西小学校2年

本田 彩葉

わたしのかみの毛は
ひまわりみたい
くるくるであついで
といだらからまるけど
ふわふわで
かかんぼうしをかぶると
ぼわんとなる
でも耳にかけるとそれは
なかつたようになる

(評) はじめの一行、「わたしのかみの毛はひまわりみたい」で、パッと明るい気持ちになれました。すばらしいです。かみの毛は自分の思うようにならないけれど、まるで友だちのように、詩にしてくれて、読んでいて、とても幸せな気持ちになりました。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

せんたく

城北小学校2年

木原 寧音

わたしはものほしざおです
おかあさんにたのまれて
朝から
うでを目いっぱいばしています
これはパンツです
これはシャツです
これはバジヤマです
お日さま
今日もよろしくね
光と風をすいこんで
おしごとします
がんばります

(評) なんてすてきな詩でしょう。「わたしはものほしざおです」という表現のしかたが、すごいなあと思いました。「お日さま今日もよろしくね」は、作者のすなおな心が表れていて、すがすがしい気持ちにさせてくれる詩になっていると感心しました。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

うみ

城南小学校1年

廣瀬 幹人

きれいだよ
さかなもおよいでる
いつもおよげばいいな
なみがたかくてきもちよかつた
人もいたんだよ
きれいなかいがら
またさわりたいな
なみがおどつてるみたいだよ
なみはたかい
みずいろのいろしてる
どこまでつづいてるのかな
ジェットスキーにもつたんだよ
またうみにいきたいな

(評) たのしかったうみのようすが、あふれるように思い出されて、よく伝わってきます。「ジェットスキーにもつたんだよ」の表し方がとてもよく、たのしかったようすがうかんできます。すばらしい詩になっていますね。

(彦根文芸協会 西村 和野)

佳作

ときがたつ

稲枝西小学校1年

大崎

花奈

あさがのぼつたら

よるがしずむ

それをくりかえすと

ときがたつ

たのしいときも

つらいときも

ときがたつ

はるなつあきふゆ

すごいなすごいな

ときがたつ

佳作

ねこはなぜ

城東小学校2年

江口

果凜

ねこはなぜ

いつもねているのだろう

ねこはなぜ

目が光るのだろう

ねこはなぜ

日なたぼっこをしているのだろう

ねこはなぜ

ニャーとなくのさう

ねこはなぜ

いうことを聞かないのだろう

ねこはなぜ

ひっかくのさう

ねこは

ふしぎな生きものだ



佳作

すってんころりん

平田小学校2年

濱田

幸樹

すってんころりん

あいたたた……

きよろきよろ見ると

ここどこだろう

すると鳥がたすけてくれた

この道を通るんですよって

入選

ふしぎだな、ふしぎだよ

平田小学校2年

柳本 知里

雪がふって
 雪がとけたら
 どこ行くの
 川に行くのか
 いやちがう
 それじゃあびわこに行くのか
 それとも 海に行くのか
 ふしぎだな
 ふしぎだよ

雨がふって
 雨は みずたまりになったら
 どこ行くの
 雪といっしょのびわこ
 それじゃあ
 海 それとも川
 ふしぎだな
 ふしぎだよ

入選

いもうどのはなちゃん

若葉小学校1年

田中 大珠

ぼくはやさいはたべない
 けどはなちゃんはたべる
 だからぼくはまける
 ぼくははなちゃんとなかよしなときもある
 けどときどきけんかする

ぼくがはなちゃんになんかしたら
 はなちゃんがやりかえす
 それでままがおこる
 すぐにぼくもはなちゃんもなく

でもなかよしなときもあつて
 いっぱいあそぶのが
 めっちゃたのしい

入選

もつとあそぼ

平田小学校2年

南部 花寧

もつとあそぼう
 もつとあそぼう
 たのしいな たのしいな
 やめられない

もつとあそぼう
 もつとあそぼう
 ともたち わたし こうえんに
 ふたりで あそぶ
 たのしいな たのしいな

ずーうつと
 あそんで いーたいな
 どうしよう どうしよう

もつとあそぼう
 もつとあそぼう
 やつとやめたよ
 またあした

入選

きれいだよ

平田小学校2年

磯崎 めぐみ

あきはきれいだな
 おかあさんこわいけど すきだな
 にじはにじ色きれいだな
 きらきらきれいな空
 スポーツこう園はすごいすべりだい
 先生がお話をする
 ねこじゃらし くすぐつたいな
 いつもけんかをするおにいちゃん
 いろんな色のやさしい
 パレードはたのしいな
 あめはポタポタおとがする
 ポスターカラーはきれいな色がたくさんね
 スタンプをポンポンしたよ
 おもしろい形のたこ
 きれいなこと
 たのしいこと
 いっぱい いっぱい あるよ

【小学3年生・4年生】

特選

たからもの

城北小学校4年

牧野

圭佑

キラーン！
 夜にカヤックで空を見ていると
 きれいな星がたくさん
 小さな星から大きな星まで
 まるでわたがしのよう
 また見てみたいたからもの
 ザブーン！
 船から下りて海を見ていると
 きれいな魚がたくさん
 小さな魚から大きな魚まで
 まるでこんぺいとうのよう
 また見てみたいたからもの

(評)

旅行のときの思い出ですね。「キラーン」「ザブーン」という星のきらめきや波の音が初めて見つけた驚きと喜びでとらえられています。「わたがしのよう」「こんぺいとうのよう」という表わし方からも作者の心の中や星や魚のようすが生き生きと伝わってきます。これからも「たからもの」をたくさん見つけて、詩につづってくださいね。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

お母さんの梅ぼし

城南小学校4年

藤田 夏漣

梅って青から 赤に変身する

お母さんが固い青梅を

赤しそで一ヶ月くらいつけて

やわらかい赤梅に変身させるのだ

真っ赤になった赤梅は

太陽の暑い光をあびて

ザルにほしてある

おいしそうだな

つばが出た

ほしてある赤梅を

こっそり ぬすみ食い

とつても すっぱくて

口が曲がったみたい

さつきよりもっと つばがでた

お母さんの作る梅ぼしは

太陽の光のように

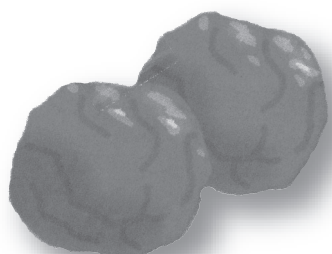
心もあたたかくなる

とくべつな梅ぼし

(評)

お母さんが長い日数をかけて梅を「青から赤に変身」させるようすを表わしています。一か月もかけて赤梅になること、毎日ザルにほすお母さんの手間、加えて「暑い太陽の光」が大切なことをみつけています。さらに「ぬすみ食い」で味をためみながら「口が曲がるみたい」すっぱかったのに、心があたたかくなったと表わしている作者。その表情と心の中がとてもほほえましく浮かんできます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

カブトムシ

旭森小学校3年

井上 太陽

にげたいなあ

この虫かごから

行きたいなあ

森の中へ

とびたいなあ

空高く

あいたいなあ

家族や友だちに

(評)

夏休みにカブトムシを飼った体験から生まれた詩ですね。飼っている様子は表現されていませんが、いっしょけんめいに世話しているうちに、いつの間にかカブトムシの気持ちまで分かるようになったのですね。

カブトムシに話しかけている作者の声まで聞こえてきて、心を打たれます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

くしやみ

平田小学校3年

廣田 来海

パパさんくしやみは 強くて大きい
 ヘックション！
 ママさんくしやみは なんだかおめかし
 はつくちよん
 にいさんくしやみは 急いで
 ヘブシユン
 ねえさんくしやみは かわいく
 くしゅん
 くーちゃんくしやみは 練習中
 ヘっへっ
 どこ行った？くしやみさんが出てこない
 へっ…へっ…へぶちゅーん
 あれ？のんびりさんだ わっはっは
 みんなでいっしょに ハックシユン
 大せいこうだ わっはっは

佳作

せみ

稲枝東小学校3年

有田 凜音

ミーンミンミン
 じつととまっている
 なきごえが
 ぴたつととまった
 うごかない
 すつととんでいった
 ああよかった
 いきていた

佳作

新幹線のまどの外

城南小学校4年

吉田 治旦

新幹線のまどの外は
 いろんな景色が広がっている
 遠くのところの景色も見れる
 けど景色が近いと
 あまり見れない
 ゆっくり走ってほしいなあ
 新幹線は止まらない
 それが新幹線
 新幹線のまどの外は
 まだ見ぬ景色が広がっていく



入選

カメラ

城西小学校4年

中村

颯

ぼくのカメラは
おじいちゃんのおふる

パシヤカシヤ
家族

パシヤカシヤ
風景

パシヤカシヤ
お花

ピース
へんがお

いろんな写真
全部思い出

入選

花とうたを

高宮小学校4年

小山

凜

風とゆらゆらうたっている

のんびりのんびりうたっている

わたしもいれて

ゆらゆらのんびりうたおうよ

気持ちをこめてうたってね

花とのんびりうたおうよ

入選

トマト

城南小学校4年

國安

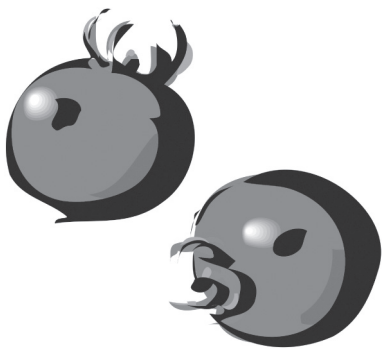
祐衣

トマトっていいな
子供のころは青い色
大きくなると赤い色
色がかわっていいな

トマトっていいな

おひさまのひかりをあびて
すくすくそだっていく
あつたかくていいな

トマトになりたいな



【小学5年生・6年生】

特選

桜の木

平田小学校6年

坂田 ちはる

桜の花がひらいた
その目の前に女の子がたつ
その子のおやが走ってくる
そしてその子はかえっていった

桜の花がちり葉になった
その目の前で女の子が走りまわる
その子の友だちがおいかけてくる
そしてその子はまた走っていった

桜の葉の色がかわり穴があいた
その目の前で女の子が木の実をひろう
その子の姉が歩いてくる
そしてその子は木の実を持って歩いていった

桜の葉がちり白いわたがのつた
その目の前にきれいな女性がたつ
その人はいない
少ししたらありがとうといって帰っていった
その人は二度とこなかった

(評)

作者自身が感性の高い詩心を持っていると思います。さらに、物語を作詩していくことが上手で、読み手を引き込む魅力があります。最終連には少し胸の痛むような雰囲気のある大人っぽさが感じられ、最高の作品となりました。これからも詩への道を歩かれますように。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

タンポポ

金城小学校5年

上田 てる葉

いつもひとりぼっちのぼくみたいに
さみしいなんておもう花はいない
どうしてだろう

さみしいな
さみしいな
カンカン

こころのさけびがきこえてくる
いつかいつかきみにあえる日まで

ぼくはずっとさく
てんにむかってさく

(評)

一連目の一行目、「ひとりぼっちのぼく」に作者自身の心の内を重ねながら読みとると、二連目のつぶやくようなさみしさが伝わってきます。思わず立ち止まる雰囲気になっています。詩全体が短く、ことばも少ない分、作者の情熱が凝縮され、凜とした作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

準特選

もみじ

城東小学校6年

清水

彩音

暑い 夏が 過ぎて
秋が やつてきた

鮮やかな 緑色だったぼくたちも
赤色に 染まった

みんなといっしょに
秋の風に 吹かれて
秋晴れの空を 舞って
ひらひら くるくる
踊って 踊って 踊って…

そして

君の足元に

ふわっと 着地した

君が言う

「秋だね」

ぼくも答える

「秋だね」

(評)

普段通りの生活を過ごしているおとし頃の作者のようですが、作詩をするときになると、歌うように、跳ねるように、事柄をつかまえていくことが上手です。心に残った四、五連目は読み手が優しく声かけされたようで、ほのぼのとした恋心を感じさせる作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

最高学年

稲枝東小学校6年

藤岡

彩葉

今年最高学年になった
学校のリーダーとしてがんばらなくては
でも

それと反対に
たいへんだ もう無理
あきらめるときもある

今年最高学年になった
たいへんなこともある
あきらめたい心がある
でも

心の向こうには
がんばる 無理をしない程度に
あきらめずにがんばる心がある

今年最高学年になった
自分の心の中で応えんする
自身をもつ心
そんなリーダーでありたい

(評)

作者の最高学年としての心のようすが真に迫って綴られていて、詩へと昇華されていくのがよく理解できる詩となりました。自身の内なる心の動きがよくみつまられていて、一歩もひかない強さを最終連に感じとることが出来、力強く素敵な作品となっています。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

佳作

つらい、死にたい人へ

城北小学校6年

山田 珠子

「死にたい」

そっか

こんなこと

いつちやいけないのかもしれないけど

死んでもいいと思うよ

だって君はもう生きていけないんだよね

それぐらいつらいんだもんね

もしつらいときに

だれかにつらいっていえば

だれかがあなたのきもち わかれば

こんなことにならなかつたかもしれないね

きづいてあげられなくてごめんね

でも そのつらいこといやなこと

いっしょにわけあっていきたいな

佳作

おしやべり

若葉小学校5年

権代 優紗

真夜中の0時になると

とまっていたぬいぐるみがうごきだす

たがいにたすけあいながら

よいしょよいしょと平らな土地へいどうし

夜の大きわぎがはじまつた！

きみ なんていうの？

わたし くまのくーちゃん！

ぼく くーくん

にてるねっ

大きなふとんにのってポヨンポヨン

風船をたたいてたたいて

バンッ

大きな音にみんなはびっくり

そしてあの子がおきだした

みんな いそいで死んだぶり！

ハイッ

そのかけ声と共に

朝が来た！

佳作

おいしいスイカ

旭森小学校5年

川村 瞳衣

おいしいスイカって なんだろう

あまくて 赤くて じゅくしてて

種がすくなく みずみずしい

おいしいスイカってなんだろう

つめたくて いいにおいで

実がいつばいで すっごい大きい

色がちがえば どうだろう

見栄えも悪いし おいしそうじゃない

味がちがえば どうだろう

すっぱいなんて 食べたくない

種がいつばい どうだろう

種でスペースとっちゃって

実が全然ないんだよ

パサパサスイカ ぬるーいスイカ

小さいスイカ スカスカスイカ

スイカは今のままがいい

変わっちゃダメだよ スイカくん

まじくなるまでずっと一緒

夏はスイカの季節です

佳作

友達からのプレゼント

城西小学校5年

徳永 明李

友達から
 プレゼントをもらった
 それは まがたま
 でも ふつうのまがたまじゃない
 「大切なナカマ
 絆 いつも一緒」と
 書いてある

友達も 同じものをもっている
 だからこそ
 学校が ちがっても
 週に一回しか 会えなくても
 ずっと友達
 つながっている絆

入選

水と心

平田小学校6年

小杉 海吾

つめたかったら
 あたためてあげればいい
 水も心も



入選

私はけしゴム MONO

旭森小学校5年

井上 璃子

今朝お店にならべられた私
 あっお客さんがきた
 あっバイバイ
 お友達のMONO夫君とMONO子ちゃんが
 行っちゃった
 また会いたいなMONO夫君とMONO子ちゃんに
 あっバイバイ
 私も男の子に買ってもらうのかな

あっお家についた
 汚いふでばこに入れられた
 一時間目 国語のじゅぎょう
 使ってもらえた
 あっおられた
 私の頭と足は はなればなれ
 となりの女の子が
 ボンドで手じゅつしてくれた
 ありがとう女の子
 大事に使おうけしゴムを

入選

みんなちがう

城西小学校5年

安達

史織

きゅうり トマト なすび
これらの共通点は何でしょう？
野菜？ 正解！

すずめ つばめ ひよこ
これらの共通点は何でしょう？
鳥？ 正解！

種類は同じ でも
それぞれはちがう

きゅうりは緑 トマトは赤 なすびはむらさき
すずめは茶色 つばめは黒 ひよこは黄色

まとまりで考えれば同じ でも

それぞれはみんなちがう
それぞれはみんなちがう

入選

ゆめ

城南小学校5年

中清水

初奈

「ゆめ」はおもしろい
ゲームの中に入ったり
死んだ人とゲームしたり
「ゆめ」はふしぎ
知らない人がでてきたり
空想上の人物になれたり
いろんなことのできる
「ゆめ」は想像のかたまりだ！



【中学生】

特選

希望の花

西中学校3年

後藤

練

魂は旅をする
 いくつもの時をこえ
 いくつもの星をこえ
 我が身に宿るまでの間
 どれほどの世界を見たのだろう
 どれほどの時空をこえたのだろう
 魂には一瞬でも
 私には一生の思い
 魂は何度も身に入り
 そして何度もくり返すらしい
 私はそんなくり返しの一つ
 あの日うまくおちて
 あの時はまだ何も知らなくて
 ただ楽しいだけの日々
 いくつもの時を過ぎて
 初めて知ったあの気持ち
 いつも闇に包まれて
 心はいつも青い闇
 ただ終わりの見えぬ日々
 でも決して無駄にはならず
 今になって初めてわかる

あの一時は あの想いは
 決して無駄ではなかったと
 だが今でもこわくなる
 あの時を思い出すたびこわくなり
 心には青い闇
 ポタリ
 ポタリ
 一度崩れたあの頃が
 今では種となり
 今では水となり
 今では土となり
 今では光となり
 魂をこえ咲きほころう
 希望の花 ガーベラ
 花びら一つ欠かさずに
 明日をこえて咲きほころう
 大きく強く 希望の花

(評) 魂ってなんだろう?とあらためて問い直されてみると、答えに詰まってしましますが、魂は旅をしていろいろな人の中を歩いていくという発想はとてもユニークで、自由な詩の世界を感じます。そして作者の辛い体験が魂につながり「こころはいつも青い闇」という美しいフレーズから、再生して強くなっていく物語が浮かび上がります、身近な題材が美しく詩的に描かれています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

時

南中学校3年

三橋 力也

時がどんどん過ぎていく
 止まればいい：一秒一秒流れていく
 悲しくて くやくくて 涙した日
 時を忘れ 楽しく 笑い合った日
 一日 二十四時間 みんな一緒
 でも過ごし方は皆それぞれ
 今日が過ぎればまた明日が僕を迎えてくれる
 明日をどう迎えるかは今日までの僕しだい
 ならばこの限られた今日を精一杯生きよう
 どんな時を過ごそうか
 下を向いていてもいい事なんかない
 上を向いて一歩ずつでいいゆつくりでいい
 嫌な事があっても勇気をもって前に行こう
 明日は必ず来るんだから
 心配せず次へ進もう
 時がどんどん過ぎていく
 後悔しないように：一秒一秒大切にしたい

(評) 《時》という言葉には不思議な響きがありますね。時間とも時刻とも違う、なにか特別な広がりを感じさせて、《時》には、背景や人、こころの動きや気持ちなど、いろいろなものが存在しています。「時を大切に生きていきたい」という作者の想いの深さが、よく伝わってきます。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

【総評】

(小学生の部)

今年の出品数は多くはありませんでしたが、はっと目をこらしたくなるいくつかの作品に出会えてうれしく思いました。自分の目や耳、指先、心など体じゅうのアンテナを鋭くして、見つけたことや感じとったことをすなおな自分らしい言葉で表わせていました。

近年、詩の出品数が少なくなっています。詩は字数を気にせず、書きたいことが自由な行数と内容でのびのびと表現できます。

「どんなことを書こうか」「どんな様子を書こうか」と迷うと思いますが、日記に書き残すように、メールを打つように、気軽に日々のくらしの出来ことや思いを短い言葉で書きとめていってください。

(中学生の部)

出品数が少なくて残念だったのですが、作品は質の高い読み応えのあるものでした。

詩を書く時に大きくリズムとアンチリズムに分けることがあります。現実のことを詩として表現する作品と、夢や幻想など現実ではないことを題材にして作品を作っていく場合です。それぞれに素晴らしさと難しさがありますが、今回の特選作品に出てきた「時」や「魂」はアンチリズムへの大切な入口といえるでしょう。詩の世界は広くて深いのですが、眼には見えない「時」や「魂」を通して詩の言葉の世界を旅していけば、きっと本物の生きる真実に出会うことができるでしょう。期待しています。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)